

	同志社大学会計学研究会OB会機関紙 <b>エトワール</b>	<b>発行所</b> 同志社大学会計学研究会OB会 〒602-0046 京都市上京区上立売通 新町西入西大路町61番地の1 同志社大学学生会館 会計学研究会
		<b>創刊</b> 昭和46年10月10日 <b>発行人</b> 木戸脇 美紀 <b>編集人</b> 大串 季帆

## 会計研で半世紀を過ごして

同志社大学 名誉教授 **百合野正博**

1969年春、「学術団会計学研究会」の総会で三回生が「会計研の活動と他のクラブ・サークルの活動は両立しない」と断言した意味を、我々一回生は夏休みの合宿で痛いほど理解することとなりました。実際、春学期の例会はそれほどきつくなく、連日のように開催される学生集会やバリストの高揚感のうちに過ぎ去りました。

そして迎えた初めての夏合宿。本栖湖畔での3泊4日は「地獄」と「仏」の両方との遭遇を通して大学での勉強のイメージを掴んだ時空でした。7～8人ずつのグループに分かれて小部屋でテキストの輪読をしましたが、どのグループでも、一回生の発表は二回生のコメントとそのコメントすらひっくり返す三回生の機関銃の連射のような指摘・批判・解説によって打ち砕かれ、予習のレベルの低さを思い知らされることとなりました。

宿題のテキストを読むだけでは全く不十分だったのです。関連した専門書を読まないと社会経済的背景は理解できないことや、それが理解できないと会計学は理解できないことを教えられました。夜、足りなくなったお酒を買いに行く途中、一緒に歩いていた松本くん（のちの幹事長）が「いいクラブに入ったよなあ。あんな先輩になりたい」としみじみ言った声をはっきりと思い出すことができます。

C P Aコースだったので、二回生からは7科目全てを例会で勉強し、さらに三回生からは答案練習会が加わるという過密スケジュールになりました。例会参加者の意識と勉強量がレベルの高低を決めるという意味では、私が部長や顧問として関わった経験と比較すると、体育会ボクシング部や応援団3部（指導部・吹奏楽部・チアリーディング部）の活動の濃密さに匹敵すると思います。

もちろん、今も例会や合宿は行われていますし、他大学の会計研との討論会も開催されています。しかし、中身が濃密ではないのです。私はずっと違和感を感じつつ、それを解消できないまま定年を迎えることとなりました。

その違和感の原因は、現在の会計研には「学術団」という呼称がついていないことにあると思っています。2005年の校友会解散を契機として学術団は消滅しました。いつの頃からか、執行部の諸君ですら「会計研はサークルなので、例会も合宿も自由参加です」と言うようになりました。今の淡泊な上下関係から察すると、O B会の消滅すら視野に入る日がやってくるかもしれないと危惧しています。



半世紀の時間差がある2枚です

## 会 務 報 告

## 2019年度秋季OB会報告

2013年度生 安藤 響

2019年10月26日（土）、今出川キャンパス良心館にて2019年秋季OB会が開催されました。

まず、現役報告として現役生より2本の論文が発表されました。

【管理部門】2017年度生 山下大貴さん

『日本のメンタルヘルス不調問題に対する管理会計的アプローチ  
—目標管理制度の活用可能性—』

【管理部門】2017年度生 中山人夢さん

『中小製造業の労働生産性向上に対する管理会計の活用可能性』

山下さんの発表では、昨今の企業の問題の一つであるメンタルヘルス不調を取り上げ、目標管理制度によるメンタルヘルス不調の解決可能性及び企業業績悪化の解決を提案しました。メンタルヘルスという現代の問題を管理会計の視点から論じるとても意欲的な論文であり、質問時間ではOBさんからも様々な意見が飛び交い白熱した議論となりました。

中山さんの発表では、中小製造業の労働生産性の低さを問題点として取り上げ、その解決の為に人的資源管理の導入を提案しました。この時点ではどのようなアプローチで人的資源管理を導入するかは定まっておらず、OBさんからの実体験を基にしたアドバイスなど様々な意見や提案が挙げられ、とても実りある議論となりました。

今回の発表では、両者とも数字での評価が難しい事柄を管理会計のアプローチから論じようとする挑戦的な姿勢が印象的であり、OBさんからの質問や意見交換にも熱が入り、良い刺激となったように感じられました。

その後は、『一問一答 現役から先輩への質問コーナー』として、現役生からOBに向けて様々な質問が飛び交いました。「財務会計の仕事での役立ちは？」「会計士にこれから求められるスキルとは？」「大学院に入るきっかけやメリットは？」現役生からの質問に対し、OBの方々の昔の経験や実務上での踏み込んだ話などから様々な回答があり、一OBである私としても非常に興味深い話を聞くことが出来ました。

OB会の後は、「がんこ 三条本店」で懇親会が行われました。現役生も沢山参加し、とても賑やかな懇親会となりました。普段はなかなか会うことが出来ない先輩方や同期との話に花を咲かせ、後輩達との就活や会計研の現状の話の聞いたり、とても楽しく、同時に懐かしさも感じる素敵な時間となりました。



## 現役コーナー

## OUR YEAR!

2019年度生 領田 美依奈

私たちが会計学研究会に入会して1年が経過した。この1年間どのように成長し、変わることが出来たのであろうか。私はこの1年を通じて様々な自信がついたと思う。新歓期のブースの活気に戸惑っていた頃とは段違いだ。それこそ、仲間の存在が大きかったと感じている。

まず、秋学期の活動を振り返ろう。財務例会では『コーポレート・ファイナンス-基礎と応用-』新井富雄・高橋文郎・芹田敏夫著（2019）、管理例会では『管理会計の理論と実務（第2版）』川野克典著（2018）のテキストを用いた。両例会とも、1回生が中心となって担当箇所のスライドを作成し発表を行った。その後、上回生の方々のフィードバックという形で進められた。やはり初めて学ぶ専門的な内容を簡潔に説明することは難しいものだ。しかしながら、自分なりに内容をかみ砕き、工夫を凝らした発表が見受けられた。上回生の方々も、全員が内容を理解できるよう丁寧に説明して下さった。それだけではなく、財務例会ではアイスブレイクの時間が毎回設けられ、勉強だけではなく交流といったメリハリのある例会となった。管理例会では、毎回の確認テスト、中間・期末といった総復習テストによって知識の定着が図られた。

次に、11月26日から28日の3日間、同志社大学ではEVE祭が開催された。この期間によって、私たちの仲がより深まったといえよう。会計学研究会からはチーズハットグの販売を行った。たくさんの方々に足を運んでいただくことができ、売上も好調だったといえる。看板作り等の準備も、講義の合間を縫って手伝って下さったため、スムーズに終わることが出来た。しかし、EVE祭当日、私たちの見込みが甘かったことを思い知ることとなる。例えば、予想以上の販売数による翌日以降の在庫の減少、調理が追い付かないなど、全て挙げようと思ったらきりが無い。けれども、私たちは臨機応変に対応することができた。自ら進んで買い出しに向かう者、売上に貢献しようとシフトの時間帯だけでなく時間外、そして1日を通して手伝う者もいた。素晴らしい団結力だったと思う。先輩方もお忙しい中、差し入れ片手に訪れ、ブースの士気を鼓舞していただき感謝申し上げる。

このように、私たちの1年間はとても有意義なものとなった。最後に、このような情勢のため、春合宿・春関が中止となり、実際に議論を行う機会が遠のいてしまったことを残念に思う。

「学問には平坦な大道はありません。そして学問の険しい坂道をよじのぼる労苦をいとわないものだけに、その明るい頂上にたどりつく見込みがあるのです」

私たちは、これからも食欲に知識を追求していこうと思う。



## 各年代からの会計研、百合野先生へのメッセージ

### 生涯の友を得た会計研

#### 一そして、研究の心を芽生えさせてもらった一

1955年度生 加藤 盛弘

大学に入学してすぐに会計学研究会に入会した。研究会では主に簿記の問題を解いていたが、どうも易しすぎて頼りなかった。当時、商学部の入試科目は数学も必須で、その数学には簿記・会計も含まれていた。商業高校出身の受験生の多くは簿記・会計で受験し、合格すれば、簿記学Ⅱ（必修科目）からスタートした。そんなことが背景にあった。

2年生になったときに同学年の5人（みな商業高校出身で全商簿記の1，2級の力は持っていた）で話し合い、もっと高いレベルのクラス（グループ）を作ろう、ということになった。そこに1学年下の人たちも参加してくれて、旧至誠館の教室を借りてスタートした。なんとも生意気で、無鉄砲なことをしたと思うが、研究会の先輩たちは黙認してくれた。（小生が1年生のとき、4年生に、在学中に公認会計士二次試験に合格された松下先輩がおられたのだから、決して研究会のレベルが低かったのではなく、そういう運営方針だったのであろう。）その時の同学年の5人と1学年下の3人がまさに生涯の友となった。卒業後も交流を続け、最近では傘寿（80歳）のときに、お互いに祝おうと集まって、気炎を上げた。今度は米寿の時に集まろうと約束している。

その新しい研究会（グループ）では、今から思い出しても、我ながらよく本を読み、勉強したと思う。それぞれ自分で専門書を読んできて報告しあったり、問題をさがしてきて解きあったりして、大いに議論した。当時、図書館の分室のようなところで、新しく購入した本を図書登録する前に1週間ほど展示するところがあった。その新しい会計専門書も授業の合間に、入りびたりするようにして読んだ。しかし、その時の勉強は、いわば定説化あるいは正式化された見解を正しく理解して、ひたすら「正しい」知識の量を豊富にすることであったように思う。

3年生になると、前記の同学年5人のうちの3人が同じ会計学のゼミに入り、あとの2人も聴講生として出席したりして、ゼミでも研究会でもお互いに刺激しあって勉強した。そのうちに、学術専門書には、それぞれに、その1冊を通して、著者が主張する独自の問題意識があることに気づくようになった。そして、おぼろげながらではあるが、徐々に自分の問題意識は何だろうかと思ったりするようになった。研究をしよう、続けてみたいとする心が芽生えて来るようになった。同志社大学会計学研究会とは私にとって、そういう故郷のようなところである。（65年ほど前のことなので、思い違いをしているところもあるかもしれない。）

（商学部1955年入学、元同志社大学教授、会計学、アメリカ会計制度論等担当）

## 百合野教授に贈る言葉

1966年度生 湯浅 光章

私は、百合野教授の高校、予備校、ゼミ、クラブを通じての先輩にあたる。腐れ縁としか言いようがないと教授は思っておられるであろう。

百合野教授と初めてお会いしたのは、50有余年前である。教授は、私が4年次生の時の新入生であった。その時分の会計学研究会は、新入生が150~200人近くが入部してきたと思う。新入生の皆さんに、日商簿記3級を教えていた。だいたい、新入生は1学期の6月に日商簿記3級の試験があり、そのまま黒沢清先生の「会計学の基礎」及び山下勝治先生の「会計学一般理論」を2年生から教わり、夏合宿に向かっていき、恒例の夏合宿が終了すると、20~30人程度に部員数が減るのが通例であった。教授によると、私は簿記の話はせずに、四方山話や、自分の経験談ばかりを話していたらしい。今思うと私としては、自分が編み出した勉強方法や、サブノートの作り方などを伝えたかったのだと思う。

それから10年ほど後の1980年代に、ピート・マーウィック・ミCHEL会計士事務所（今のKPMG）のニューヨーク事務所から帰ってきたころ、教授の授業の90分を使って、海外での経験を学生諸君に話したことが記憶にある。背広、カッターシャツ、ネクタイ、ベルト、靴、そしてアッタシュ・ケースのすべてがブラウンという姿であったと思う。白髪であったため、その姿は如何にもアメリカ帰りという印象を強く持たれたと、教授から後程お聞きした。

その腐れ縁ゆえに、教授には私のクライアントでの簿記講義や、研修のお手伝いをして頂き、また同志社大学のMBAや、商学研究科において嘱託講師として10年近くお世話になったこともあった。教授著の『会計学本質論』の中でも、多くのページを割かれている会計学研究会との出会いは、教授にとって同志社生活の始まりであり、会計学との出会いであったであろう。そのことは私にとっても同じであり、50年余に渡る百合野教授との出会いは、私の中でも大きな財産であり、多くの人との繋がりを、広がり頂いた出会いであった。

字数の制限もあり言い表せないことも多いが、教授の出会いに感謝し、今後のご活躍、ご健康をお祈りして送る言葉とする。長い間ご苦勞様でした。

---

## 百合野教授と私

1969年度生 藤木 常男

百合野教授と私は69年度生ということで、昨年同志社大学に入って半世紀となりました。彼とは幼稚園、小学校と同じで中学生時代は英語の塾でも一緒でした。幼稚園の時には幼稚園の水飲み場で並んで"うがい"をしている写真が残っています。実は大学に入る迄は彼の方が私より1年上で、高校までは"百合野さん"と呼んでいたのが、大学に入り"百合野"と呼び捨てにしてよく文句を云われました。大学入学後、オリエンテーションでどのクラブに入ろうかと迷っていたら、何年かぶりで彼に会い、彼から一緒に「会計研」に入らないかと云われ、余り考えもせずに入ったのが会計研でした。私達の学生時代は70年安保の真最中で、入学した年のゴールデンウィーク前に全学ストが始まり、ストが解除されたのが、何と年末の12月中旬で、その間、学校に来ても授業は全くなく、あるのはクラブ活動だけという信じられない時代でした。

今年の1月にOB会より連絡を頂き、彼の最終授業に参加させて頂きました。その時に彼の同志社に対する愛情、学問に対する情熱、現在の教育状況に対する不満等を聞き、深く感銘を受けました。辞職後も引き続き研究に励まれることを期待しています。

さて、OBの皆様、最近OB会に出席出来ず申し訳ありません。一昨年より同志社のある小学校区の役員をすることになり、春と秋の休日は何かと行事があり忙しくしております。今回の"コロナ"という異常事態の中でもOBの皆様におかれましては、お身体を大切にお過ごしください。

## 百合野さんの思い出

1971年度生 **太田 達也**

会計研では、伝統的に先輩を何歳年上であろうと「〇〇先輩」とは呼ばず、「〇〇さん」と呼んでいたのので、「百合野さん」で書かせていただく。

百合野さん、無事定年をお迎えになり、お祝いを申し上げます。

百合野さんとは私が1回生の時からよくお話をさせていたが、私の中で印象に残っている思い出は、私が2回生（当然百合野さんは4回生）の時、1回生のコース（理論とCPA）分けの時期に、遅れて入会したいと女子新生がボックスを訪ねてきたとき、たまたまボックスには私と百合野さんがおり、彼女の入会動機が税理士志望だったので、理論コースに入るよう説得していた時に、百合野さんが私の説明に激怒（私にはそう思えた）され、本人をほったらかしにして、二人で激論を交わしたことを覚えている。結局彼女はCPAコースを希望し、入会することになった。

その後、コースが別々だったため、彼女のことは忘れていたが、卒業後に百合野さんが結婚されたと聞き、お相手は誰かなと思っていたら、何と「その彼女」だった。

あの時の百合野さんの熱心さが理解できたと一人で納得したものである。

これからも二人でお幸せにお過ごしください。

## 私世代の会計研を振り返って

1984年度生 **和泉 英樹**

まずは百合野先生、定年退職おめでとうございます。百合野ゼミ6期生の会計研の思い出を綴ります。

当時の夏合宿は、飯野利夫著「財務会計論」をテキストに、1回生は割り当てられた範囲をマジックで模造紙にまとめ上げ、2回生は指南役。夜は飲みながら、あーでもないこーでもない議論しながら徹夜で内容を叩き込む。翌朝からの例会で1回生が順番に発表し質問攻めに珍回答、知識量と説明力に勝る3回生が1・2回生を撃沈する。しんどかったが充実感があった。春合宿は2回生から1回生への講義形式の経済学例会で、レクレーションも有り楽しかった。いずれの合宿も、参加対象外の暇な3・4回生は酒飲みたいがため乱入する。

コースは2つで、私はCPAコース、もう片方は理論コース。シククリクリシイの例会、討論会等もほぼ全員参加していた。例会後は同期と「中島食堂」のオムライスを食べた。各種会の開催後には鍋・中華・すき焼きなどで大宴会が催され、先輩や後輩と友好を深めた。

さて、（旧）学館別館の壁面に貼られた革〇・中〇・民〇のビラの中を通り抜け3Fの会計研BOXへ。テーブルには誰かの「明解簿記」（簿記テキスト）、理論コースが作成したわら半紙の論文、少年漫画雑誌などが散乱。黒板には例会の開催日時と使用教室が記載。1986年4月の3回生から今出川と田辺に分かれ会計研運営に困難はあったが、よくぞ後輩たちが乗り越えてくれたと感謝している。

卒業後、制度会計のうち税務会計を扱い、現在は財務会計とさらには経営判断に使う管理会計も扱っている。数字は嘘をつかないが、過去の数字に隠された真実を把握できないと嘘になる。未来の数字に込めた理念や方針を把握できないと嘘になる。こうした思いは、会計研で鍛えた「数字（カネ）を見る目」「本質（モノ）を見る目」「人（ヒト）を見る目」からなっている。

最後に、ゼミでも更に鍛えられた思考回路は今でも健在です。今後ともご指導ご鞭撻の程よろしくお願いいたします。

## 感謝！そしてお疲れ様でした！

1991年度生 **堀井 亮良**

まずは、百合野先生、お疲れ様でした。ゼミ生（第11期生）でもある私ですが、ゼミ生による先生の退職祝賀会も延期となり残念です。

百合野先生がイギリスからの留学を終えてから2年目にゼミ生になりましたので、1回生の時に先生は日本にいません。1期先輩の小林悦子先輩（お元気ですか？）にどのような先生かいろいろ聞いていたのを思い出しました。

加藤盛弘先生も当時ゼミ生募集されていましたが、同期の会長である鈴木豊和さんがゼミ生になったので同期の責任は十分果たしている（鈴木氏は優秀なのです）と皆で納得していたことも思い出しました（91年度生の会計研の人数は諸事情により少なかったのです）。

当時会計研のOB会といえば、大御所の方々が数多くご出席されておりましたので、少し敷居の高いところというイメージが強かったです。しかし百合野ゼミのOBでもあることが少し敷居を低くしてくれたと勝手ながら感じております。

百合野先生は会計研のOBでもあることは変わりません。いつまでも同志社会計研に喝を入れていってください。

---

## 定例会から見る会計研と百合野先生

2008年度生 **田村 祐司**

百合野先生、定年御退官おめでとうございます。また、会計学研究会、ゼミ、職場でも大変お世話になりました。筆を執るにあたって、百合野先生とのエピソードを思い起こすと、私は定例会のことが想起されます。

例えば、私が2回生の時に、当時の3回生と百合野先生主導のもと、京田辺キャンパスで教授例会を始められ、ゼミ生でなくとも、百合野先生とディスカッションをする機会が設けられました。当時の1、2回生は京田辺キャンパスがメインでしたので、会計研における両キャンパス間の交流に大きく寄与した取り組みだったと思います。

そして、私が3回生となり、財務部長として財務例会の運営方式を変更した際には、昔の定例会について教えていただいたり、運営方式やテキストについて相談に乗ったりしていただいたのを覚えています。お陰様で、毎週の財務例会に20名前後の1回生が参加するようになり、新入生の定着率も大きく改善されました。

こうして淡々と書きますと、先生の功績が十分に伝わらないものと思いますが、当時の会計研は、2009年度生の人数が5名程で、財務例会に参加する1回生は1人か2人という状態にありました。まさに存亡の機にあったと思いますが、上記のような定例会の改革により、2010年度生以降は持ち直し、現在に至るまで各年度にそれぞれ20名前後の現役生が所属しています。

これは当時の定例会だけを切り取ったエピソードですが、百合野先生のお力添えがなければ、今現在、会計研が存続していたかどうか分からないということが伝わればと思います。そして、百合野先生におかれましては、会計研の維持・発展の為、今後も引き続きご助力いただけますと幸いです。



## 私と会計研、百合野先生との思い出

2011年度生 村上 航平

まずは百合野先生、ご退官おめでとうございます。百合野先生とはOB会ではあまりお話ししていなかったのですが、学生時代の思い出について会計研の活動と一緒に書かせていただければと思います。

私が3回生の時に文系の1～4回生全員が現在の今出川キャンパスで学ぶようになり、私は通常の財務会計・管理会計を学ぶ例会以外の教授例会によく足を運ぶようになりました。教授例会では各回生が混ざって毎週様々な議論を行う例会でしたが、お忙しい中お時間がある時には百合野先生にもご参加いただいております。ご参加いただいた時は鋭い指摘や学生ではなかなかとり着けない指摘等をしていただいております、年2回の合宿や私は百合野ゼミに所属しておりましたのでゼミでも同様でした。当時あまり先生とお話しする機会はなく、非常に良い経験であったと思います。

卒業してから5年ほど経ちますがあのような議論の場は非常に貴重だったのだということを当時以上に痛感することがあります。会計研の思い出と書きながら教授例会の話だけとなってしまいましたが、本当に貴重な機会だと思うので、現役生の皆様は同じような機会があるのであれば試しに参加してみるのもよろしいかと思います。

ご退官後も会計研OBとして、サークルの発展のため活動をしていただければ幸いです。最後に改めてですが百合野先生、本当にご退官おめでとうございます。長い間お疲れ様でした。

### 1/24(金)に行われた百合野先生最終講義の様子です



## 2020年 春季OB会について

本年の春季OB会につきましては、7月4日(土)に開催を予定しておりましたが、新型コロナウイルス感染症の感染拡大に伴い、中止とさせていただきます。何とぞご理解のほどよろしくお願い申し上げます。

住所変更などがある方につきましては、名簿を修正いたしますので、その旨をFacebook(会計学研究会OB会のアカウント)やE-mail(大串:kogushi@mail.doshisha.ac.jp)にご記載いただけますと幸いです。



## 2019年度秋季OB会出席リスト

1971年度生	1名	1995年度生	1名	2014年度生	2名
1981年度生	1名	1998年度生	2名	2015年度生	1名
1982年度生	2名	2004年度生	1名		
1984年度生	1名	2006年度生	1名		
1985年度生	1名	2008年度生	3名	現役	16名
1986年度生	1名	2013年度生	4名	計	38名

## 同志社大学 会計学研究会OB会 会計報告書

## OB会収支計算書

(自 平成30年10月1日 至 令和元年9月30日)

単位 (円)

収入の部	金額	支出の部	金額
前期繰越	553,748	通信費	75,754
OB会費収入	97,000	機関紙発行費	131,889
OB会懇親会費収入 (秋季)	269,000	OB会懇親会費 (秋季)	279,730
OB会懇親会費収入 (春季)	315,000	OB会懇親会費 (春季)	176,000
受取利息	0	支払手数料	102
広告収入	10,000	消耗品費	9,935
寄付金収入	33,000	前払金支出	69,828
前期前受金	▲115,000	次期繰越	419,510
合計	1,162,748	合計	1,162,748

## 繰越金明細

令和元年9月30日現在

単位 (円)

内訳	金額
現金	776
小口現金 (現役生立替)	▲44,859
ゆうちょ銀行 通常貯金	373,103
振替預金	90,490
合計	419,510

以上の通り、ご報告申し上げます。

書類作成責任者 柳瀬 英美

監査の結果、上記収支計算書は、正確かつ適正であると認めます。

令和元年10月24日

監事 松本 洋和

## ◆訃報

1972年度生 安田豊様が、去る平成29年11月5日に逝去されました。  
ここに謹んでお悔やみ申し上げます。

## ◆ご寄付の御礼

1973年度生 蔦村照明様よりご寄付を賜りました。温かいご芳志に厚く御礼申し上げます。

## ◆エトワールへの寄稿のお願い

OB・OGの皆様におかれましては、定期OB会だけではなく、その他でもお集まりの機会があるかと存じます。活動報告・予告など紙面が許す限りエトワールへ掲載いたしますので、ご機会ありましたら是非ご寄稿ください。

エトワール編集の都合上、次号への掲載には2019年7月31日までに、編集人（大串）までご連絡いただければ幸いです。

連絡先（大串）：kogushi@mail.doshisha.ac.jp

## ◆お知らせ

広告出稿を募集しています。最大16枠（1枠はA5の1/8サイズ）、1枠10,000円～（10,000円以上でご協力いただける金額をご入金ください）、おひとりで複数枠をご使用いただいても結構です。

ご賛同いただける方は、広告のデータを添付して大串(kogushi@mail.doshisha.ac.jp)までご連絡ください。なお、広告のニーズがなくともご寄付いただける方も併せてご連絡をお待ちしております。

振込先：ゆうちょ銀行（店番：448 普通預金：4451560

同志社大学 会計研究会OB会）

## ◆会計学研究会OB会ホームページのご紹介

<http://www.dacob.org/>（会計学研究会OB会ホームページ）

<http://www.facebook.com/dac/ob.7>（Facebook）

## 会費納入のお願い

OB会の運営は皆様からの会費によってまかなわれております。  
年会費 3,000円（終身会費 20,000円）となります。ぜひご納入の方よろしくお願いたします。

振込先：郵便口座

口座記号：010909

口座番号：34178

加入者名：同志社大学会計学研究会

## ◆お知らせ

次回2020年度秋季OB会は10/31(土)開催予定です。奮ってご参加ください。